

この世のこと

， 辻 章



この世のこと



辻 章

この世のこと

一九九一年八月一〇日 第一刷印刷
一九九一年八月一五日 第一刷発行

著 者 辻 章

発行者 福武總一郎

発行人 鐵 福武書店

東京都千代田区九段南二一三一二八
千〇三電話(〇三)三三三〇二二二
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

平版印刷 栗田印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替え致します)
(定価はカバーに表示してあります)

辻章(つじ あきら)
一九四五年、神奈川県に生まれる。
横浜国立大学経済学部卒業。出版
社勤務ののち、八六年、「三田文
学」に「未明」を発表。著書とし
て「逆羽」がある。

この世のこと
目次

魔	鯉	蝶	猫	鳩
173	133	93	51	7

装画 井上公三
装丁 中島かほる

この世のこと

鳩

その駅の、プラットホームのベンチに、津村周は、一時間ほども前から、座っていた。周の足もとには、十数羽の鳩が、まとわりつくように群れ集まり、小走りに右往左往していた。鳩は、くうくうと鳴きながら、歩くたびに、しきりに首を上下させた。

何本もの電車の路線が、そこに集中して、また出て行く、郊外のターミナル駅だった。周の座っているホームは、どことなくしんとして、人影がまばらだった。

昼を、少しまわっていた。この時刻は、乗降客の最も少い時間帯なのだろう。ベンチに座っているのは、周ひとりだけだった。

周は、なぜ自分は、こんな所にいるのだろう、とでもいうような、見慣れないものを見るような眼つきで顔を上げ、あたりを見まわした。

眼の前に、隣りのホームが見える。その向うにも、いくつものホームが、ずっと先の方まで重なり合うように並んでいる。そして、軌道数がホームとホームとを、規則正しい濠割のように、隔てていた。

二つ向うのホームに、頻繁に電車が入り、そしてすぐにベルが鳴り、またあわただしく出発して行く。そのたびに、ホームの上を乗降客がせわしなく行き交い、人と人との影が何重にも重なり、その影が、スクリーンに映し出された何かの模様のように、平べったく入り乱れる。

二ヶ月前まで、周は毎朝、その二つ向うのホームから電車に乗り、都心の会社に通い、そして夜、また同じホームに帰って来たのだった。

時おり、何かの都合で、日中、そこで電車を待っていることもあった。しかし、どんな時刻にも、そのホームは、まるで休み時間の小学校の校庭のように、人の声が折り重なるように厚く充満し、吐息や体温や、コンクリートを踏む靴の音が、何色ともつかず、

かきまぜられ溶け合つた油絵具のように、あふれ返っていた。

会社に通つたのは、二年間だけだった。そして、やめてしまうと、その二年間を過した自分の時間は、さらさらとした透明な水のように、音もなく流れ去り、消えてしまった。ぼつりぼつりと、染みのように、所々、小さな記憶が残っているだけだった。

周は、膝の上に置いてあつた紙袋から薄い煎餅を一枚つかみ出し、両手で細かく砕いて、ばらばらと足もとにまき散らした。ベンチのまわりの鳩が、一斉に騒々しい羽音を上げ、喉を鳴らしながら、落ちて来た餌に向つて突進し、騎馬戦のように折り重なり合ひはじめた。

二、三枚碎いては、足もとにまき、周は軽く手をはたいて、またベンチの背に体をもたせかけた。こうやって座っていると、オフィスの回転椅子に座っていたあの時間と今とが、何の節目もなく、のつぺらぼうにつながっているような、白っぽい気持がした。一時前に、このホームから出た特急電車に乗るつもりで、周は駅にやって来た。けれども、ホームで待っていて、やがて眼の前に列車が入って来た時、突然、ひどくおつくうな気持に襲われて、結局、ベンチに座ったまま、周はその電車を見送ってしまった。

とりわけて約束や用事のある旅行ではなかった。そのことが、週の胸の底に本能のように眠っていたおつくうさを、眼ざめさせ、かき立てたのかもしれない。

ここに座っていることと、電車に乗り、どこか他の場所に移動することと、その間に、どういふ違いがあるのだろうか。

電車が出て行った後、周は、胸の中で、ぶつぶつとそんな風にも思った。

次の特急電車には、もう一時間と少し待たなければならなかった。

三年ほど前、周は一度だけ、この同じホームから特急電車に乗ったことがあった。その頃、周は大学を出、定まった職業を持たずに、ぼんやりと毎日を送っていたのだった。

ある日、深い山奥の村にひとりで出かけたきり、そのままそこに住みついて、漢方薬の薬草の採集をはじめた大学時代の友人に、葉書で誘われ、周は電車に乗り、その村を訪ねたのだった。歯止めのないその頃の生活を、そのまま延長するように、その気になれば、しばらく友人と一緒に住んでみても良いし、数日で帰って来ても良い、と内心で思っていた。

いや、ただそればかりでもなかったのかもしれない。

周は、その時、自分でもはつきりとは意識しなかったが、胸の底のどこかで、何か常ではない、事件のようなことが、その旅行で起きてくれることを、期待していたようでもあった。

想像のつかないこと。想像の中には、おさまりきれないようなこと。

正体のわからない力で、体を驚づかみにつかまえ、地の一角に放り出してくれるような、そういう種類のことを、周は、定まらない、気まぐれなアルバイトなどで日を送りながら、ぼんやりと考えていたのだった。

それは、外から見れば、一見何でもないことかもしれない。

あるいは、突拍子もない、命にさえ関わるような、大事件かもしれない。

何であれ、しかしそれは、心底から周の胸をつかみ上げて、これこそ自分の身に起きていることにちがいない、これこそが、確実に、自分の事件だと思わせてくれるような、そういう種類のことでなければならなかった。

その頃、周は、自分の体の中に、奇妙な知恵の輪が、埋まりこんでいるような気持を抱えていた。

組み合わされた輪を外すことは、それほど難かしくはない。しかし、外したとたんに、また、その外した形が、新しい、組み合った輪になっている。そういう、厄介な知恵の輪だった。

そんな知恵の輪が、なぜ体の中に入りこみ、埋まりこんでしまったのか、周自身にも、はつきりとはしなかった。

しかし、確かに、まるでしぶとい寄生虫の一種でもあるかのように、それは周の中にいた。そして、周の息づかいを、二六時中うかがいつづけ、頃合いの拍子に、ふいと首を持ち上げて、いよいよ、何かにとりかかろうとしている周の決心や足どりを、わけもなくおしとどめてしまうのだった。

外しても外しても、また新しい知恵の輪ができていくだけ。それならば、実は、知恵の輪を解くことには意味がないのではなからうか。いや、なぜ知恵の輪を解こうとするのか、その問いこそが知恵の輪なのかもしれない。周はぐるぐるとそんなことを考えていた。

大学に入って、一年ほどたった頃だった。